

二〇二二年六月一九日(参加者一名)

滝壺に散りたる瑠璃は糸とんぼ	菜々
ささら波立てて早乙女白脚絆	"
目薬に頼る晩学明易し	"
ウオーキングマシンを友に梅雨籠り	"
地に頬をつけてあぢさゐ雨に伏す	よし子
山門の高きをめざす山の蝶	"
梅雨濁りして大淀の激ちけり	"
螢火のかくも幽けき涼	"
葉づたひに光移らふ初螢	有香
スキップの子が見え隠れ白日傘	"
麦秋や滋賀の山々低きかな	"
梅雨空へアガパンサスの弾けけり	せいじ
大波が洗ふは梅雨の埠頭かな	"
すぐ消ゆる雨の水輪や梅雨の川	"
茶白山ときの声かも青嵐	百合
あかり消せ螢の乱舞見る岸边	"
風涼しフランスパンは前籠に	"
縄文の土偶を染める夕焼けかな	泰三

通夜の道誘ふごとく螢の火	"
梅雨霧の沖に島影消えにけり	わかば
天蓋をなせる老松梅雨の間	"
梅雨しとど五百羅漢の肩を打つ	つくし
碑の梵字をなぞる蜥蜴かな	宏虎
誰が魂ぞ吾につういと来る螢	うつき
神事待つ御田掠めてつばくらめ	"
見送りの母の日傘のいつまでも	"
昇りゆく螢仰げば七ツ星	"

定例会の選

二〇二二年六月一九日(参加者一名)